

# 米山朴庵 日本画家

米山朴庵は、1864(元治元)年9月29日、山梨県南都留郡境村無番戸(現在の都留市)に、父天野栄衛、母かくの二男として誕生。本名は登(旧名和蔵)で画号を朴庵、別号に停雲閣、漫素軒、六石堂とも称しました。1872(明治5)年、8歳の時に境村の米山喜七の養子となり、境尋常小学校を卒業します。その後、時期は不明なもの、東京市日本橋区富沢町の皆川芳造の姉・きぬと結婚して牛込区に世帯を持ち、帝室技芸員であった瀧和亭たきかていに弟子入りしたことが判明しています。

師匠の和亭は、1832(天保3)年1月3日(注1)、江戸千駄ヶ谷村に生まれ、画を大岡雲峰、長崎の日高鉄翁に学び、山水花鳥画にその技を示し、1893(明治26)年、現在の人間国宝に相当する帝室技芸員を拝命しています。和亭は1901(明治34)年に没しますが、生前は弟子の朴庵を伴ってたびたび野田を訪れ、興風会初代理事長でもあった茂木七郎右衛門(1860~1929)宅に寄寓し多くの作品を残した人物です。



100年以上を経ても美しい色彩を保っています

今回展示の作品は署名と共に「癸丑」(1913・大正2年)とあることから、朴庵50歳のころのものと推察できます。また、『都留の今昔』によれば、「朴庵は、大正初年に茂木氏宅の襖絵二十四枚を弟子の栗田蘭林(野田市出身で茂木氏の世話で弟子となった)をつれ、二か月間住込んで揮毫している」とあることから、本作品も時期的にはちょうどそのころ制作されたものと思われ、おそらく寄寓先で描いたものと考えられます。このような背景から、この作品は当会の初代理事長から寄贈を受けたと考えることができます。

なお、画界の派閥関係や師のえこひいき等が嫌いで、当時の展覧会への出品は一度もなかったと言い、『都留の今昔』では「…卓越した技術をもちながら当時の画壇の在り方に反抗し、名声を欲しない立派な芸術家ではなかっただろうか」と評しています。

[参考資料] 『都留の今昔』都留市老人クラブ連合会・1978年3月発行／『野田人物伝』野田市郷土博物館・2005年10月29日発行

(注1) 上花輪歴史館収蔵絵画図録『瀧和亭作品集』(財)高梨本家 上花輪歴史館には、1830(天保元)年庚寅1月3日とある。